

ガネーシャ原理を喜び祝い、実感する



ある人々は、彼をヴィグネーシュワラ、すべての障害物を取り除く者と呼び、他の人々は、ヴィナーヤカ、至高のリーダーとして崇めます。儀式を執り行う者にとって、彼はアグラプージャー、最初に崇拝されるべき者であり、学生たちにとってはヴィッディヤー ブッディ プラダータ、すなわち知識と知恵を授ける者となります。彼の帰依者たちは、ちっぽけな乗り物（ネズミ）に乗った彼をムーシカ ヴァーハナと描写し、その高貴な家族と関連づけるときは、彼をシャンブ クマーラ [シヴァ神の息子] やパールヴァティー ナンダナ [パールヴァティーの息子] と呼びます。象の鼻をした、そのうっとりときさせる美しい御姿を思い浮かべるとき、帰依者たちは彼を、スンドラ ムカ シュリ ガジャーナナ、ガジャヴァダナ、ガジャムカ、ランボーダラ、として崇めます。そして、彼の広大無辺な御姿を瞑想し、彼をすべての音と学びの源、原初の神として賛美するとき、プラナヴァ スワルーパ [オームの化身] として、シュリ ガネーシャとして、礼拝を捧げます。この魅力的な御姿の神の名称は無数にあり、同じく魅惑的なのは、この全能者のうっとりときさせる表情が、いかにして太古の昔から、様々な国々で人々の想像力を捕らえてきたかということです。

それが、ガネーシャ チャトゥルティー (ガネーシャ神の礼拝に捧げられる日) がインド全国のみならず、ジャワ島、バリ島、カンボジア、タイなどといった遠く離れた国々でも、生き生きした活力を授けるお祭りである理由です。インド西部、特にマハーラーシュトラ州では、このお祭りが何千人もの心の中に途方もない宗教的な熱情を呼び起こし、群集を熱狂的な信仰による法悦の境地へ

と活気づけるのが見られ、信仰されています。

ヒन्दゥー教徒であろうと、イスラム教徒、ゾロアスター教徒、キリスト教徒であろうと、誰もが「ガナパティ バッパ モーリヤ (偉大なるガナパティ)」というスローガンのもとに参加します。ガネーシャ チャトウルティーを喜び祝うことは、内なる霊的な喜びの源泉とつながることになります。

このように、インドの様々な地域でこの神聖な行事は祝われていますが、ブラシャーンティ ニラヤムで毎年起こっていることは、本当にひととき優れたことです。

学生たちのお祝いは、サイクルワント ホールのバガヴァンの御前で始まります。その吉祥なる日の朝、バガヴァンの学生たちは、ガネーシャ神を讃えるたくさんの歌と詩句のガーランド (花輪) を捧げます。

そのプログラムの後に、学生たちは学生寮のプレーヤーホール (祈祷室) に集まります。そこで寮内の各部屋に設置されるすべてのガネーシャ神像に対して、入念に、伝統的な礼拝が捧げられるのです。その後、ファンファーレと喜びと共に、それぞれのご神像を迎えるために装飾された数々の部屋にガネーシャ神を運び入れます。それから数日間、これらの部屋は神聖な寺院に生まれ変わります。数日間、ヴィグネーシュワラ神 (障害を取り除くお方) への非常に誠実な礼拝を執り行った後、学生たちはご神像の浸礼の日に、愛するバガヴァンのもとにガネーシャ神を運ぶための準備をします。

※ 浸礼：全身を水に浸す洗礼の形式





[ガネーシャチャトウルティーの動画へ](#)

この幸福をもたらす神の美しいご神像、斬新的に装飾がなされた神輿、活力にあふれ、大声で叫ばれ続ける詠唱、きらびやかな衣装、踊り、歌、そして紛れもない快活さに加えて、神聖なる村、プッタパーティにおけるガネーシャチャトウルティーをいつも際立たせていたのは、その祝祭の随所においてバガヴァンが深く関与なさっていたことです。実のところ、いつもスワミ御自身が、ブラシャーンティ・ニラヤムのすべての施設に美しいガネーシャの像を送られていたのです。スワミがご神像の浸礼の日時と場所と方法を決められていました。いつどこで、どのクラスが、何をすべきかにさえ言及されていました。スワミはいつも、この壮大な祝祭において、またバガヴァンが計画や指示をするすべてのイベントにおいて、唯一のインスピレーションの源です。スワミはこの機会も、彼の若い連隊に忘れられない教訓をしみ込ませるために使われました。例として、サティヤサイ大学 ブリンダーヴァン校の現在の学寮長である、T. ラヴィ कुमार博士が語られたお話があります。



ラヴィ クマール博士のお話

私たちのインド文化では、ガネーシャ神への礼拝からすべてのものごとが始まります。実際、このガネーシャ チャトウルティーのお祭りは、スワミが厳粛な態度で執り行ってくださるものです。私はすべてのお祭りの中で、このお祭りはスワミと彼の学生たちに関して何か特別なものがあると感じています。当時、スワミは毎年、この時期に学生寮へ来られていました。もしスワミが外出されていたときは、プッタパルティに戻られるとすぐに、学生寮のガネーシャ神像が設置されている場所に来られました。スワミは毎年変わることなく、そうされてきました。

これから、私は皆さんを、私が学生であったときの布林ダーヴァンへとお連れします。それは1970年代のことでした。当時は、ガネーシャの神像を作ることが男子学生の伝統でした。学生たちは近くの池（ホスコテの近く）から粘土を持ってきて、礼拝されることになる神像を作っていました。そして、作り終えたらスワミに祝福してもらいました。それは一大イベントでした。

ある年、スワミはプラシャーンティ ニラヤムにいらっしゃいました。ガネーシャチャトウルティー祭の数日前に、当時の学寮長が言いました。

「我々は池から粘土を持ってきて神像を作っているが、粘土を焼いていないので、二、三日すると神像にひび割れが出てきてしまう。そのような神像を礼拝するのは伝統的にも正しいことではない。だから、今年はそんなことをするのは止めにしよう。その代わりに、普通の神像を買ってきて、それを礼拝することにしよう」

その次の日に、学寮長がプラシャーンティ ニラヤムへ来るようにとの電話連絡を受けました。スワミが電話をかけてこられたのです。戻って来たとき、学寮長はスワミが彼を呼び、直ちにたくさんのことを議論した後、

「ガネーシャ チャトウルティーはどうなっていますか？ あなたはどのような手配をしましたか？」と、尋ねられたと話してくれました。

そのとき、学寮長はこう答えました。

「スワミ、私は学生たちに、手作りした神像はひび割れができるので今年は神像を買って礼拝することにしよう、と伝えました」

するとスワミはおっしゃいました。

「いいえ、ダメです。それは伝統的になされる方法とは違います。ヴェーダの時代には、人々は自分の家で神像をつくり、礼拝していました。それが正しい方法です。ですので、学生たちに神像を作るように伝えなさい」

学寮長が私たちのところへ来てこの話をしたとき、私たち、特に芸術グループの学生たちはとても興奮しました。時間はもう5～6日しか残されていませんでした。ウォルター・コーワン地区の隣のS.N.シン地区と呼ばれる場所に、ある寮があります。当時は建てられたばかりで、中には誰も住んでいませんでした。制作担当の学生たちは立ち入り制限されている場所を欲していたので、そこで神像を制作し始めました。

学生たちは四個のレンガを敷き、その上に台を置きました。そして、ガネーシャ ガーヤトリーと「ジェイ ボロ バガヴァン シュリ サティヤ サイ ババジ キ！」を唱えながら、最初の粘土をコテで盛ったそのとき、一匹のネズミがどこからかやってきて、台の下に入りました。

しかしながら、学生たちは、「いやいや、そのうちネズミは出て行くだろう。さあ、作業を続けよう。止める必要はない」と言い、作業を始めました。その後、学生らは神像づくりを続け、完成までにまるまる5～6日かかり、ガネーシャ チャトゥルティー当日のプージャー（礼拝）が始まる午前5時、礼拝堂へ完成した神像を移動する時間になりました。全員が神像の周りに集まり、ガネーシャ ガーヤトリーとサイ ガーヤトリーを唱え、神像を持ち上げたちょうどそのとき、そのネズミが飛び出してきました。それは、そのネズミが神像を制作していた間、ずっとそこにいたということです。これはとても驚くべきことでした。とても小さなかawaiiネズミで、皆がそのネズミについて興奮しながら幸せそうに話していました。

※ ネズミはガネーシャの乗り物です。

数日後、スワミが布林ダーヴァンに来られました。

スワミは車から降りられると、

「皆さん、ガネーシャ プージャーはどうでしたか？」とお尋ねになりました。

私たちは皆、

「スワミ、とてもすばらしかったです」と言いました。

すると、スワミはおっしゃいました。

「私はネズミを一匹遣わしましたが、ちゃんと来ましたか？」

ということは、私たちが神像を制作していた間、神の直接の代理人が実際にいてくれたわけです。ですので、人生のあらゆる側面において、このようにスワミは起こっていることに関与し、スワミがいつも私たちと共にいることを示してくださるのです。スワミは肉体の姿で現れることもあれば、スワミが遍在であり、いつも私たちと共にいて、私たちを守護し、導き、見守り、私たちに神の愛を表しているのを明確に示してくださることもあります。

出典：ラジオ サイ ジャーナル 2011 年 第 9 卷 9 号より抜粋

http://media.radiosai.org/journals/vol_09/01SEPT11/05_ganesh_chaturthi_1.htm